

# 湘南オープンウオータースイミング大会 2011

2.5キロの部出場 2011/8/28

\*葉山湾一周コース\*

大会が近づくにつれ台風も静かに接近。

いつになく台風のおそい。一時間に10キロしか進まないそうだ。私のマラソンの記録よりもおそい。私は10キロのタイムが57分40秒。ベストタイムで53分！。台風より早く駆け抜けることができる。

今年の台風は雨あし激しく長い間降り続くので被害が心配されていた。結局のところ土砂災害等が発生し各地に大被害をもたらした。

大会2日前、海はずいぶん荒れてきている。茅ヶ崎の海岸から海を眺めれば沖合一面白波が立ち、とても泳げる状況にない。

大波小波が遠く沖合から間断なく押し寄せ「おいおいよせやい！」といったところなのである。

この状況ではスイミング大会は中止もあるなと思っていたが、いざ大会当日を迎えてみると意外にも風が治まっており、葉山の海は入り江になっているせいもあって静かなものだ、拍子抜けしそうなほど静かである。

しかし台風は確実に接近をしており、沖合ではうねりが消えた訳じゃない。

この湘南オープンウオータースイミング大会も3回目を迎えるので、私の戦いへの緊張感が消えているのが淋しい。戦いの前のドキドキ感はいいものだ。一つ間違えばめった打ち、意識もうろう、目眩、息切れ、吐き気。悪くすれば死に至る。

冒険心のない人生なんて傷んだ果実と同じな訳で、おいしい訳がない。戦いを始める前は、やはり人間恐怖心で心臓バクバクであって欲しいものだ。めまいで意識もうろう。そんな自分に打ち勝って大会をやりとげる。それこそ男の生きる道。

戦い終わって傷んだ体を、猫のようになめなめしながら気持ちを鎮めていく。こんな時間を太陽の下でやり過ごす時、人生は最高だね。

今年は右膝の故障もあり湘南国際マラソン大会以来まったく走っていない。走りたくても痛みがひどく走れない。

「膝が悪いなら湘南大病院にいつて見なさい私は完全に治ったわ」という風評を聞きつけ、湘南台病院にいつて診察を受けてみた。なんとかりハビリを受けて回復することはできないか。注射は嫌だがほかの方法なら許そうと思っていた。

しかし医師の思いもよらぬ発言に唾然とした。レントゲン結果を見ながら「どこも悪くないですね」と一言で終わり。

それでも膝は明らかに腫れており、走るには痛すぎる。走れない。

「これってどこも悪くないという症状なの？」

「走ってもいいですよ、どこも悪くないですから」「年齢もかなりいってますから」回答になっていない返事である。西洋医学では私の膝は完璧のようだ。

最近泳いでいても右足のふくらはぎ辺りが突っ張ってくる感じがする。これもどこも悪くないのだろう。西洋医学的には。さらに加えて医師は「私もトライアスロンやっているんですよ」ときたもんだ。「君のことをきいてるんじゃない！」支払いを済ませて案内所のところに来たとき、車いすの女性がいた。明るい笑顔がまぶしかった。

久しぶりによく晴れ、風もなく波穏やかな土曜日の朝を迎えている。

大会が終わって数日過ぎた夕方、ひと泳ぎをしようと思いきや海に出かけたが、海一面に白波が、空は曇り海の色は恐ろしげに怒り狂ったおじさんのようにどす黒い。

ウインドサーフィンが待ってましたとばかりに波を蹴って走り出し猛スピードで海面を飛ぶように走る、引かれそうで危険がいっぱいでとても泳ぐ気持ちになれない。

大会が終わっているのにこんな荒れた海でのスイミングはストレスの解消にならないので、このまま弱虫の犬ころポチようにすごすごしっぽを下げてもどってきた。

そのまま夕食の材料を買いに出かける。

今日は活きの良いさんまを食べよう！

スーパーに行って魚売り場を覗いてみると昨日は新鮮なさんまが籠から飛び出さんばかりにあふれかえていたのに、今日はあの元気なサンマ達の姿が一匹もない。

全員が一斉に海に飛び出したのだろうか。活きの良さそうな奴らだったからな～残念。昨日買っておけば良かった。サンマも姿を変えてトビウオになって脱出したに違いない。スーパーというのはそういう場所なのか。

昨日買ってガッツリ一気に食べておけばよかった。

人生というものはタイミングを失うととんでもないことになる。しかし問題はサンマだけのことであるからぐぐっとこらえた。その横をチラット眺めればうまそうな鳥賊がいる。完全にさばかれ、お刺身状態になっているので鳥賊の表情はうかがい知ることができないが買って食べた。

それから数日が過ぎた日。湘南オープンウォータースイミング大会からはずいぶん過ぎた穏やかな青く輝く海の日。のんびり太平洋を沖に向かって泳いでいく。9月に入った平日の朝早くともなると海は静かだ。浜から500メートル以上遠ざかると太平洋独ぼっちの世界が訪れ、時の経つのも忘れるようなさわやかさだ。1時間以上も泳いだら岸に戻ってくるのにずいぶんの時間を要した。こんな気持ちのよい海も久しぶりだ。私の心もいつもこうあってほしいものだ。

さてレースに戻ろう。今年は葉山湾を巡る2.5キロのコースだ。そして台風がすこぶる遅い速度で四国辺りを進んでいるようである。

ここ葉山湾は岩場で囲まれているせいとか少しおきに出ると水がすこぶるきれいだが、あいに台風がきているせいであつてか浜際は濁っているが、1キロも沖合に出ればすこぶる透明度は高くなるだろう。

当然今日はずいぶんも高くなっているようだ。

透明度の高さでは春先に訪れたテニアン海はすごい。20~30メートル下まで完全にクリアで距離感がつかめないほどである。

泳いでいるときに大きな亀が私の体の下に接近し、誘うように100メートル程を一緒に泳いでくるのである。危うく竜宮城に連れて行かれるところを、ふっと我にかえって引き返したからいいようなものの、いやいや、あやうし、あやうし。

葉山の海ではそこまでの透明度はないので、余計な心配はしなくていい。

満身に泳げない人々にとってはよけいな世話かもしれない。

竜宮城がどんなにすごいところかちょっと見てみたい気がする。浦島太郎氏の話だけではどうも話としてうますぎる。

男にとってはウホウホといった感じだが、鯛やヒラメも好きだが、毎日刺身という訳にもいくまい。舌平目の生きのいい奴だったらムニエルにしたいが、この場所でも料理は可能なんだろうか？

女性の接待が多いような気がするが、客が女性の場合はまたそれなりのウホウホ感があるのだろうか。

やはりこの間お誘いを受けたときに思い切って竜宮城にお伺いするようだった。3泊4

日ぐらいの日程でどうでしょう。

いつもそうなんだが旅行に出て3日程はいいけれど、それ以上になると食事がどうもマンネリ化するし、日本でない場合は食事がどうも合わないのももう少し考えさせて欲しい。

いよいよスタートの時間だ。オープンウォータースイムのスタートは、立っている状態から飛び込んでいくので水面上の面積が狭くなる。

我先にと突き進むと、芋の子を洗うように選手達がごちゃ混ぜになるわけで、蹴られる、上に乗っかられる、足引っ張られるといった格闘技がしばらく続く。謙虚な私は毎回嫌な思いをして蹴っ飛ばしているの、今年が一番後ろから颯爽と泳ぐことにした。

プオンのスタート合図の後、選手の皆さんにどうぞお先にと進んでいただき、後ろから浅瀬の水の中をジャブジャブ先へ進む。意外なほど遠浅で、のどかなスタートである。戦いの感じはなく、海水浴にきた団体さんの雰囲気である。

それでもだんだん深くなり、やがて泳ぎ始める。一番後ろからゆったり泳ぐつもりだが、私より泳ぎの遅い人はいるもので、泳ぎ始めると前の人邪魔で障害物競争そのものである。内側に回り込みながら泳いでいるが、次から次へと人の足が迫ってきて疲れる。

それでも500メートルを過ぎた辺りで体がほぐれてきて、自分のリズムの泳ぎが始まる。先は長いので前を泳ぐ人にピッチを合わせ淡々と進む。1キロ先に黄色のブイがあるはずだ。

毎回海で泳ぐ時に思うのは一体いつまで泳いでいるのだろうということ。プールと違って折り返しがないのでただひたすら前進あるのみ。時計も使用を禁止されているので距離と時間が確かめられない。ただひたすら泳ぐのみである。

マラソンは同じまっすぐでも海で泳いでいるのに比べ、身長の高さから世の中を見ているので視界の良さが抜群だ。地面すれすれに目がついていたら、どんなに不便で世界が小さくなっていることだろう。

地面すれすれを走り回っている蟻ん子さんは大変だろうな。蟻ん子さんはいつも忙しく走り回っているようだし足が細い、筋肉痛などは起こさないのだろうか。

お互いぶつかりそうになるシーンをよく目にするが、ぶつかって頭押さえて痛いぞと騒いでいる蟻さんを見たことがない。

蟻の世界は右側通行ではないらしく、ぶつかりそうになって一瞬立ち止まるが次の瞬間左右に分かれる。瞬時の判断で右の時も、左の時もある。すばらしい反応だ！

スイミングの場合、前がほとんど見えない海面すれすれに泳いでいる。よほど大きな目標物がない限り見えるのは波のうねりだけ。練習で海を泳いでいるときは波のうねりの方向を眺めながら多分これでいいのじゃないのかなという気持ちで泳いでいる。

一番ビリからスタートするという事は、常に抜き続けなければならないが、どっこいみんなそれなりに早く、なかなか抜けない。しかし抜いていく人はいない。フムフム皆さん早いな、などと思って泳いでいると。やっと最初の目印、黄色い大きな円錐型三角ブイにやってきた。ここから沖に平行に500メートルばかり進み、第二の黄色のブイを回って元に戻るようになる。

ここから第二のブイまでは大きなうねりがあって泳ぎにくいらしい。先にスタートした選手達の感想である。楽しみだ。

調子も次第に上がってきて大きなうねりも何のその、イルカが波の上を飛び跳ねるように、選手の群れの中に飲み込まれながら先を目指す。

敵に追われて休むことも許されぬ兵士のような。おさな子がスーパーで「おかーさんチョコレート買ってー」と叫びながら追いかけるように。痛々しいまでにひたむきに先をめざす。あぁなんと純粋な行為なんだろう。

体は動かしているのに、頭は全然使っていない。まるでからっぽ。ランニングもそうだ

が、スイミングも同じだ。この何の邪魔者がいない時間をなんか役に立つことに活用できないもか。

考えてみると最近、画を描いていないな。自分で言うのもなんだが、こんなに優れた才能を持ちながら淡々と泳いでいる私は歴史に対して申し訳ないことをしているのではないか。それができないのなら夕食の献立でも考えた方がいいのかもしれない。

6月20日からほとんど毎日海に向かう。時計をセットして沖に向かって泳ぎ始める。沖にある烏帽子岩に向かって10分進んでから、今度は江ノ島の灯台を目指して15分。海上で折り返して戻ってくる。合計50分。これを通常スイミングの掟としている、この行為を私は修行と呼んでいる。

これが辛いからといってさぼると、イスラムの罰則のようにムチで背なかを打たれること10回。想像をしてみるとイデッ、うちょ～いて～というお仕置きである。

これを修行として行っているのだから同情はいらない。同情するなら金をくれ！

真夏の炎天下、海沿いを汗を飛び散らしながら猛暑の中を走る人々はすごい。又、波が全く無く、ジッと沖合で波を待つサーファーも我慢強い。修行とはいえこの地域の人々はすばらしい。

それも結構なおじさん達でいっぱいなのだ。

頭の体操が終わり始めた頃、第二の折り返しブイが迫ってきた。ここから残り1キロでゴールだ。そう思うと急に元気がモリモリわいてくる。

それにしてもゴールの位置が分からない。陸からでも1キロ先の黄色のブイがはっきりしないのに、泳ぎながら1キロ先の小さな目標物など分かるはずがない。

近年近視が進んでいるように感じる上に、乱視に老眼。曇ったゴーグルを通して世界を見るには無理がある。

しかし、後半から調子がぐんぐん上がってくるのが私の必勝パターンなので、楽しみはこれからだ。今日も体の切れがいい。ゆっくりだった腕の回転が速くなり、足のビート回数が2倍になって体が浮いたように泳いでいる。

ホーバークラフトのように浮き上がり、早い泳ぎというより飛ぶ感じ？  
透明度の高い海の中、どんどん追い越していく心地の良いこと。

突然前方を塞ぐ一列に並んだ女性の足の固まり発見。一気に追い越したいのにわずかの隙間しかない。

右に回するには相当に大回りになる。無駄が多すぎる。左はさらに大回り。ああどうしよう。迷っている場合ではない。割り込んで一気に前に出る。

いささか強引とは思われたが この一群はいわゆる仲良しグループで、エンジョイレースをしている若い女性とみた。割り込んだ瞬間その群れが「何、このおじさん。人の列に割り込んできて、ひどーい」という声が、聞こえてはこないが非難を浴びせかけるような空気が波を伝わってビンビン伝わってくる。

波動とはこういう状態なんだ。言葉なんていない。理科の実験で失敗した生徒のように淋しい思いのまま、プリップリッの若い群れを追い越していく。

これで5人は抜いたなフッフツとしたたかな笑いを波動を通してキャツらに送り返し追い越した。

調子がどんどん上がるのは気持ちだけかもしれないが、ピッチを上げたせいかわ右足のふくらはぎが張ってきたようだ。左足のハムストリングも張ってきているぞ。

突然キーンとふくらはぎがツツパてきた。『キタッ！』慌てて右手で足を押さえ、もみもみ。クロールから平泳ぎに切り替え、こりをほぐしながら様子を見る。

ピッチを落とし、ゆっくりゆっくりクロールで進む。どうやら無理をしなければいけない気がする。

でも最後までこの足は持つのだろうか。ライフガードに助けを要請するかもしれないな、などと考えながら進むうち調子が戻ってきた。

スピードを落としたせいで疲れが回復しているので、すこぶる腕のかきが軽快、軽快。再びスピードが乗ってくる。スピードが乗ってくればバタ足の回数も多くなり全速力だ。「それいけスマート！」と思った瞬間右足のふくらはぎがビーンと突っ張ってくる。再び右手で慌てて押さえ込みに入るがああどうしよう。

異常に気づいたライフガードが接近しているような気がする。何事も無かったように、平泳ぎに切り替え様子を見る。ゆっくり泳ぎをクロールに切り替える。

どうやら、ペースを落とせばなんとかいけそうである。

練習中ではないのでゆっくりもしてもらえない。不安を抱えながら泳ぐ戦いはあまり嬉しくない。

どんな大会でも、苦しくても前に進めばいつかゴールはやって来る。ただひたすら前進あるのみである。足が無くても泳いでいる人がいるのだから、人間というのは底なしにすごいものだ。生きるということはこんなに単純なことなのだ。

昔ブルガリアを旅しているとき、両足の無い人が道の向こうから這ってやってきた時には驚きで声も出なかった。

オーストラリアで道の向こうから自分と同じ大きさの大トカゲが堂々と歩いてきたのには驚いた。お互いに避けることもしないですれ違った時、自然のありように感動したものだ。そんな途方も無いことはこのレースでは許されない。周りをライフガードに囲まれてゴールに向かって進むのみ。遊ぶことさえ許されない。

ゴールに近づけば誰でも疲れなど吹っ飛んで、もうちょっとなんだから頑張ろうと思うものだ。周りの雰囲気、どことなく勢いづいてくるのが気配で分かる。こちらも負けじとパワーアップする。

周りの慌ただしさ、岸からマイクで盛んに応援しているレポーターの声。選手達の最後の追い込みを感じさせる息づかい。やっとなるべきものが来た！

いよいよゴールが、向こうから勝手に近づいてきたようだ。

ゴール近くは遠浅になっているので、どこで歩き始めるかが次のポイントである。隣に歩き始めている人がいるが、まだ腰の辺りまで水がある。まだ早い。もう一踏ん張りだ。このまま泳いで追い抜こう。

ついに膝の辺りまでになったところで一気に立ち上がり、波を蹴ってゴールに突進。

どこがゴールラインだか分からないが、やみくもに走り込む。砂浜に上がってから走る人は誰もいないがとにかく走る。メダルを首にかけてもらってもまだ走る。計測のチップをはずしてやっとなとストップ。何か物足りない感じが残ったが無事にゴールはしたようだ。

ああ、うまいコーヒーが飲みたい！

## 記録

2011年 8月      2.5キロの部      1時間 15分 38秒

参考 2010 大会      2.5キロ      1時間 07分 40秒

参考 2009 大会      3.0キロ      1時間 18分 36秒

ずいぶん遅くなってしまった。毎年これほど遅くなると先が見えない。膝を痛め、今や走ることもままならない私は思わず呆然。

竜宮城で遊んでいる場合ではないようだ。

うまい話に目がいくというのはまだ修行が足りないということなんだろう。

うまい話に乗らない人間というのは、人間と呼べるのだろうか。

いや、やっぱり行こう。そうだ！また南海の孤島に出向き前回お会いした亀さんに再びお会いし、竜宮城を訪ね過去の栄光を再び取り戻してもらえるようお願いしよう。青魚の料理はそんなに好きじゃないことも合わせてお伝えしよう。